

第57回全日本実業団剣道大会

平成26年9月15日(祝)
日本武道館
主催◆全日本実業団剣道連盟
撮影◆津田正仁



東洋水産(本社) 逆転勝利で王座へ

決勝 [大将] 下川(東洋水産・本社) ◎コー 村岡(九電工・本社)

▲副将・庄司が挙げた執念の一勝を受けて下川が奮起した。試合開始すぐ、竹刀を小さく払いざま迷いなくメンに伸びればこれが村岡をとらえた(写真)。二本目となるや、すばやく先をかけた下川。鋭く放ったコテが優勝を決める一打となった。わずか17秒の劇的な勝利だった

優勝◆東洋水産(本社)

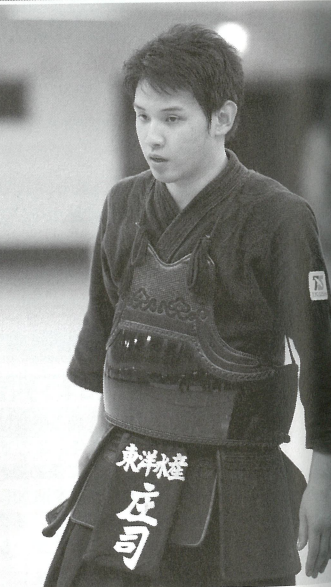
黒石稔(24歳・四段)、秀徳信彰(22歳・四段)、青木宏介(28歳・五段)、庄司祐也(25歳・四段)、下川慶次郎(30歳・五段)。監督=本郷貴久



▲先鋒戦、幸先良く一本を奪ったのは九電工・甲斐。試合開始すぐ、黒石の虚を突いてひきメンを決めた(写真)。リードを奪った九電工だったが……

◆決勝

チーム	先	次	中	副	大	得点
東洋水産(本社)	黒石	秀徳	青木	庄司	下川	2
		◎	◎	◎	◎	3
九電工(本社)	甲斐	藤井	芳野	岡本	村岡	1



最優秀選手◆東洋水産(本社)・庄司祐也(25歳・専修大学出身) 今大会では副将として出場。決勝戦、リードを許した不利な展開ながらも初太刀のメンをモノにして大将戦へとつないだ

の大将だが、今年6月に開催された関東大会では腰の負傷により序盤戦で控えに回ったという経緯がある。今大会ではいくつかの難所を切り抜ける場面もあり、相変わらずの頼れる大将ぶりを見せていたが果たして――。

大将戦での下川のパフォーマンスは圧巻だった。大一番の重圧に屈することなく、メン、そしてコテを連取。こころでここぞという力を発揮し、チームの優勝を決定づけた。

優勝の喜びに沸く東洋水産陣営。死闘を終えた選手たちの顔には涙が光る。監督を務めた本郷貴久氏(44歳)は先の関東大会では補欠としてエントリー。

下川に代わって大将を務め、チームを決勝に導いた選手でもある。その決勝戦では自身が敗れて2位に終わったということもあり、監督もまた今回の優勝には万感の表情を見せていた。

「今回は私の出番がないように、下川ががんばってくれました」と本郷監督。大将の状態については「ようやく(大会に)間に合ったような感じ。やはり絶好調というわけにはいきませんでした」と明かした。

今大会に向けての意気込みについては、以下のように語る。

「6回戦で関東大会で敗れた三井住友海上さんと当たれる組み合わせだったので、とにかくそこまでは何が何でも、という気持ちで臨みました。その6回戦で関東王者を破ることができ、チームの勢いが

全日本実業団剣道連盟に加盟する企業が日本一の座を争い、激戦を繰り広げた。大会の出場についてはとくに予選が設けられているわけではなく、エントリーは自由。近年参加チーム数が増加傾向にあるが、今大会もまた昨年より8チーム多い344チームのエントリーがあり、会場となった日本武道館は全国各地の実業団剣士で溢れかえった。

300を超える参加チームがあることから、1回戦から5回戦までは実に16試合場を使用して進行。その後、6回戦は8試合場、準々決勝では4試合場、準決勝では2試合場と、武道館内に設けられた試合場は大会の進行とともに少なくなっていく。

日本一を決める決勝戦はもちろん武道

館中央に設けられたひと試合場で争われたわけだが、まばゆく輝くこの舞台で歓喜の雄叫びを上げたのは東洋水産(本社)だった。同社にとってはこれが2年ぶり4回目の日本一であった。

決勝戦、東洋水産と日本一を争ったのは九電工(本社)である。福岡県を拠点とする九電工は、今大会が初の上位進出となる。全国的規模の大会でこそまだ聞き慣れないチーム名かもしれないが、実は現在、九州実業団大会を三連覇中の強豪である。企業数の多さから、学生剣道と同様にとくに関東地区の層の厚さが目立っている実業団剣道だが、この日の九電

工は関東の強豪を次々と連破。準決勝では伝統チーム・富士ゼロックス(本社)をも下し、文句なしの堂々たる決勝進出を



6回戦 富士ゼロックス(本社) 1代-1 NTT

【代表】岩川 コー 下村

▲昨年の覇者・NTTが先鋒戦を勝利、さらに副将戦でも竹越が先制したが、ここから富士ゼロックス・上原が逆転勝利を挙げ、勝負は代表戦に。大将・下村に対して富士ゼロックスは次鋒の岩川が登場。若手の岩川がひきゴテを決め期待に応えた(写真)



6回戦 西日本シティ銀行(本店) 0代-0 パナソニック(ES本社)

【代表】渡辺 コー 勝見

▲強豪チーム同士の対戦は5人全員が引き分けに終わり、勝負の行方は代表戦へと持ち込まれた。大将同士の再戦となった代表戦では勝見がキレ味鋭いメンで攻めるも、これを読んだ渡辺がスバリと出ゴテを決めた(写真)

西日本シティ銀行とともに3位に入賞した富士ゼロックス(本社)は、最後は九電工の勢いに吞まれるかたちで敗れたが、次鋒の岩川以外は全員30代というベテランチームながらも継続的に好成績を残し続けているのは見事といえよう。

また、今年3年連続となる全日本選手権大会出場を決めている橋本が大将を務める伊田テクノス(本社)は、ベスト8進出。最後は優勝した東洋水産に惜敗を喫するも、この日の橋本は大将戦、代表戦を勝ちに勝ち続け、来たる全日本選手権への期待を高める活躍ぶりを見せた。



準々決勝【中堅】芳野(九電工・本社) ③コー 中石(日本通運・本社)

▲勝負強い先鋒の甲斐が二本奪い、九電工が主導権を握ったかに思われたが、次鋒・藤井が手痛い二本負けを喫する。五分で迎えた中堅戦で力を見せたのは芳野。見事なコテを連取し(写真は一本目)、再びリードを奪い返した

チーム	順	先	次	中	副	大	得点
九電工(本社)		甲斐	藤井	芳野	岡本	村岡	2
		②メ		③コ			4
日本通運(本社)			②メ		③		3
		松田	谷口	中石	柴田	紺野	2



準々決勝【副将】上原(富士ゼロックス・本社) ①ー 吉村(伊田テクノス・伊奈)

▲若手で編成された伊田テクノス(伊奈)がベスト8進出。本社チームに負けじと入賞を狙いたいところだったが、富士ゼロックスの壁は厚かった。次鋒戦で先制を許すと、副将戦では富士ゼロックス・上原に逆ドウを打ち込まれ、ここで勝負ありとなった(写真)

チーム	順	先	次	中	副	大	得点
富士ゼロックス(本社)		河内	岩川	岡北	上原	住崎	3
		×	②	×	③		3
伊田テクノス(伊奈)			柴崎	中山	近藤	吉村	0
						工藤	0

たが、施設の移転等の事情により、現在は福岡市近隣の公共施設を借りて行なっているそう。

福岡勢の躍進について尋ねると、昨年の西日本シティ銀行の活躍に触れる。

「当社は九州実業団で三連覇中なのですが、西日本シティ銀行さんとは決勝を争ったこともありました。そんな中で西日本さんが決勝進出されたことで我々もがんばらねばと刺激をいただきました」

かつては九州電力が上位を賑わせたこともあったが、とくに近年は関東勢が圧倒的な力を誇り、東レ(滋賀)やパナソニックから近畿勢がいかにそこに食い込むかという図式が出来上がりがつあった。それが今回は、2年連続の福岡勢の活躍はもちろん、JR東海(本社)もベスト8にコマを進めるなど、関東勢、近畿勢以外のチームが存在感を見せた興味深い大会となった。

準々決勝

【先鋒】黒石(東洋水産・本社) ④メー 栄花(伊田テクノス・本社)



◆準決勝

チーム	順	先	次	中	副	大	得点
九電工(本社)		甲斐	藤井	芳野	岡本	村岡	2
		×	③コ	③ド			4
富士ゼロックス(本社)					④	×	1
		河内	岩川	岡北	上原	住崎	0

▲伊田テクノスの橋本が好調なだけに東洋水産としては先行しておきたいところ。先鋒・黒石は自分の役割を十分に理解しているようで見事なメンを連取(写真は一本目)、貴重な白星を得た

◆準々決勝

チーム	順	先	次	中	副	大	得点
東洋水産(本社)		黒石	秀徳	青木	庄司	下川	1
		②メ		×	×	③	4
伊田テクノス(本社)			栄花	内田	奥島	石橋	3
						メ	1



準々決勝

【先鋒】甲斐(西日本シティ銀行・本店) ③メー 市川(JR東海・本社)

▲抜群の攻撃力を誇る甲斐はチームの先鋒として適任。ここでも初太刀のコテを見事に決めると(写真)、続けざまにメンを追加し、わずか18秒の速攻勝利。その後、JR東海も粘りは見せたが、もう一本の決定力に泣いた

チーム	順	先	次	中	副	大	得点
西日本シティ銀行(本店)		甲斐	小野	本川	濱地	渡辺	2
		③メ		③コ			4
JR東海(本社)			③		③	×	2
		市川	鈴木	梅本	大川	今泉	2

「この大会での今までの成績はベスト32が最高記録。今年創部10年目になるのですが、初の入賞を成し遂げることができたので上出来ではないかと思っています」

建設業を業務とする九電工。剣道部としての稽古は月曜日、水曜日、金曜日、土曜日と週に4日設けられているというが、やはり平日の稽古日は残業等で参加できないメンバーも多いという。稽古場はかつては自社の教育センターを使用してい

準決勝

【中堅】芳野(九電工・本社) ③ドー 岡北(富士ゼロックス・本社)



▲次鋒・藤井の快勝を受けた芳野が勢いで岡北を圧倒。岡北のメンを出ゴテに切って先制するや、二本目の開始とともに大胆にも逆ドウに切り込む(写真)。富士ゼロックスは副将の上原が奮闘するも一本奪うに止まった



準決勝【副将】庄司(東洋水産・本社) ①メー 濱地(西日本シティ銀行・本店)

▲先制した西日本シティ銀行だが、東洋水産が中堅戦で逆転。再び追いつきたい濱地に対して、庄司がドウに切り込んで先制する。庄司の勢いは止まらず、見事なメンを追加し(写真)、勝負を決めた。敗れた西日本シティ銀行だが、2年連続の入賞は見事

チーム	順	先	次	中	副	大	得点
東洋水産(本社)		黒石	秀徳	青木	庄司	下川	3
		②	③	③メ	③		5
西日本シティ銀行(本店)		③メ				メ	3
		甲斐	小野	本川	濱地	渡辺	2

増したと思います」

決勝戦を争った九電工については未知のチームかと思いきや、「実は今年九州遠征に行った際に対戦しており、そこでは敗れています。そういう意味では胸を借りるつもりで決勝戦に臨みました」と、その存在は十分に警戒済みだったようだ。「近年は2位が続いて悔しい思いをする試合が続きました。それだけに今大会に賭ける思いは強かったので、この結果は本心にうれしい」

とその喜びを語った。

惜しくも敗れた九電工だが、昨年の大会で2位となった、同じく福岡県を拠点とする西日本シティ銀行(本店)に続く好結果。その西日本シティ銀行も今大会では3位入賞。九電工、西日本シティ銀行両チームの活躍はまさに「福岡旋風」と呼ぶにふさわしいインパクトであった。

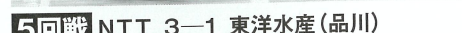
九電工の監督はチームの次鋒を務めた藤井聖司選手が兼ねる。試合終了後に話を聞けば、藤井選手は爽やかな表情で結果をこう振り返った。



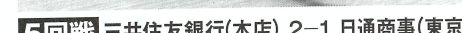
甲斐永吉 (31歳・四段)
藤井聖司 (32歳・六段)
芳野哲志 (26歳・五段)
岡本怜 (25歳・四段)
村岡正和 (27歳・五段)
坂尾真太郎 (22歳・四段)
監督=藤井聖司

甲斐勇太 (24歳・四段)
小野公次 (35歳・五段)
本川亮介 (24歳・四段)
濱地佳祐 (29歳・四段)
渡辺雄太 (26歳・四段)
中村真嘉 (24歳・四段)
監督=古賀裕章

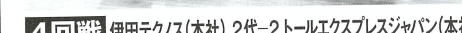
河内省吾 (32歳・四段)
岩川力 (25歳・四段)
岡北真輔 (35歳・五段)
上原祐二 (33歳・六段)
住崎誠洋 (34歳・五段)
本川耕平 (26歳・四段)
監督＝三木勤



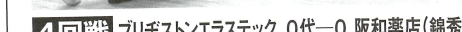
▲ここまで健闘光った東洋水産(品川)だが、前年度覇者の壁は厚かった。先鋒戦、NTT・齊藤の二本勝ち(写真是一本目のドウ)でスタートした試合は、次鋒、中堅とNTTが連勝し、勝負は前3人で決した



▲先鋒戦を制したのは三井住友銀行。山口がコテとメンを連取して自陣を大いに沸かせた。これに続きたい次鋒・坂入は久保田の手元の浮きを見事なコテにとらえて連勝を飾った(写真)



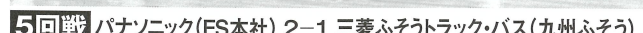
▲副将戦を終えて2対2の同点同本数。大将戦でも勝敗つかず、代表戦となった。伊田テクノス・橋本にトールエクスプレスは先鋒の信田が挑む。信田の健闘も光ったが、最後は橋本が相手の出ばなに巧みなメンを決めた(写真)



▲両軍ポイントを得られぬまま、大将・安田と先鋒・亀井の代表戦で勝敗を争うことに。開始から伸びのあるメンで攻め立てた安田。亀井の引き際を追い込んでコテを打ち込めば、これが見事に決まった(写真)



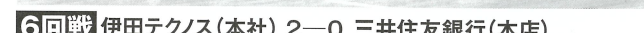
▲関東大会を制した三井住友海上がベスト8進出を賭けて東洋水産と対戦。関東大会決勝では敗れている東洋水産だが、ここでは先鋒、次鋒と一気に連勝。勝負どころの中堅戦でも青木が見事なメンを打ち込み、リベンジを果たした(写真)



▲切り込み役の岩根が伸び伸びと戦い見事な技を二本連取。鋭いコテで一本目を奪うと、二本目は稗田のメンを読んだのドウを決めた(写真)。次鋒戦こそ落としたバナソニックだが、中堅戦では高が確実に勝利し、再度流れを引き寄せた



▲先鋒戦をパナソニック・広瀬が奪えば、次鋒戦では伊田テクノス・内田が勝利。このまま大将まで引き分けが続き、代表戦へと突入。大将同士の再戦は、先をかけて攻め続けた橋本がコテを引き出してのメンを決めた（写真は攻防）



▲JR東日本、日通商事らの強豪を下してきた三井住友銀行。さらに伊田テクノスをも破って金星を重ねたところだが、中堅戦で伊田テクノス・奥島が勝利。大将戦では橋本がさすがの力を見せつけ、嘉山の手元をコテに押さえた(写真)



▲東洋水産が先鋒を、東京日動が次鋒戦を勝って、代表戦となった。東洋水産は大將・下川、それに対して東京海上は副将の谷際。勢いのある谷際にコテを放つと、下川はこれを受けざまにメン。東洋水産が接戦を制した(写真は攻防)



▲三井住友海上が中堅戦の勝利でリード。大将戦を迎えた。長身の宮崎がコテを打ったところに高村がメンで先制(写真)。その後、宮崎も執念でメンを取り返すが、最後は高村が思い切ってドウに切り込み、勝負を決めた

